

## メッセージアウトライン ヨシュア記7:1～26 「アカンの罪」

[1]「しかし、イスラエルの子らは聖絶の物のことで主の信頼を裏切った。ユダ部族のゼラフの子ザブディの子であるカルミの子アカンが、聖絶の物の一部を取った。それで、主の怒りがイスラエルの子らに向かって燃え上がった」

ヨシュアは知らなかったがイスラエル人の一人がエリコ攻略の時に、聖絶すなわち主のために滅ぼし尽くすべきものを取って自分のものとしていたのである。それはユダ部族に属するアカンという男であった。ヨシュアはエリコ攻略の時にイスラエル人に次のように伝えていた。「あなたがたは聖絶の物には手を出すな。あなたがた自身が聖絶されないようにするため、すなわち、聖絶の物の一部を取ってイスラエルの宿営を聖絶の物とし、これにわざわざをもたらさないようにするためである」(6:18) しかしアカンがその契約を破ってしまったので、主の怒りがイスラエル人に対して燃え上がり、今や聖絶の対象はイスラエル人になってしまっているのである。

[2-3]「ヨシュアは部下をエリコからベテルの東、ベテ・アベンの近くにあるアイに遣わし、彼らに言った。「上って行って、あの地を偵察せよ。」部下たちは上って行って、アイを偵察した。彼らはヨシュアのもとに帰って来て言った。『民をみな上って行かせるには及びません。二、三千人ぐらいを上らせて、アイを討たせるとよいでしょう。彼らはわずかですから、民をみな送って骨折らせるには及びません。』」

ベテ・アベンはアイに近く、背後に荒野のある町。アイはエリコの西北西約18キロメートルのところにあった。さらにその西約3キロメートルのところにはベテルの町があった。

8:25節でアイの人口は男女合わせて一万二千人であったと書かれているので、その中で実際に兵士として戦うことのできる者は三千人もいなかったであろう。エリコを滅ぼしたことでイスラエル軍の士気は大いに上がっていたと思われ、それで二、三千人ぐらいを送れば十分攻略できると考えたのであろう。

[4-5]「そこで民のうち、およそ三千人がそこに上って行ったが、彼らはアイの人々の前から逃げた。アイの人々は彼らの中の三十六人を打ち殺し、彼らを門の前からシェバリムまで追って、下り坂で彼らを討った。民の心は萎え、水のようになった」

アイはエリコより千メートルほど標高の高い所にあり、下から攻め上って来るイスラエル軍を高い所から攻める形になり、そこでイスラエル軍は思いがけず敗北して逃げ出したのである。

必ず勝利すると高慢になっていたイスラエル人の心の動揺、衝撃は大きかった。炎のように燃え盛っていた彼らの心はいっぺんに萎えて水のようになってしまった

のである。

「シェバリム」(砕く)が語源…アイの町の東の傾斜面にあった石切り場と思われる。  
[6]「ヨシュアは衣を引き裂き、イスラエルの長老たちとともに、主の箱の前で夕方までひれ伏し、自分たちの頭にちりをかぶった」

敗北の知らせは、実際の損害以上の恐怖と絶望感をイスラエルのすべての民にもたらした。

「衣を裂き」「頭にちりをかぶった」というのは絶望と悲しみ、嘆きの表現である。ヨシュアと民の長老たちは主の臨在される契約の箱の前で夕方までひれ伏し、そのようにしていた。

[7] ヨシュアは主に嘆きつつ祈る。「ああ、神、主よ。あなたはどうして。この民にヨルダン川をあえて渡らせ、私たちをアモリ人の手に渡して滅ぼそうとされるのですか。私たちは、ヨルダンの川向うに居残ることで満足していたのです」

イスラエルは今まで連戦連勝であった。それが今回は敗北した。それでヨシュアはこの敗北の背後に主がかかわっておられ、自分たちを滅ぼされようとしていることを感じてこのように祈るのである。彼は自分たちはヨルダン川の川向う(東側)に居残ることで満足していたというが、それは神の約束ではなく、イスラエルがここまで導かれて来たことの最終目的であるはずはない。

[8-9] イスラエルの攻撃とその勝利におののいていた周囲の民は、今度はイスラエルのアイでの敗北を聞いて、それに元気づいてイスラエルを取り囲んで責め、イスラエルの名を地から断ってしまう、すなわち滅ぼしてしまうであろう。そうなればイスラエルの名だけではなく、イスラエルの神の御名がそしられることになる。それでヨシュアは「あなたは、あなたの大きいなる御名のために何をなさるのですか」と神のみこころを切に求める。

[10-12] これに対して主はヨシュアにイスラエルの敗北の原因をはっきりと告げられる。

それは敵が強いのもなく、地形が不利なのでもなく、神がそうされたのでもない。イスラエル自身の中に罪を犯す者があったからなのである。イスラエルが敵に破れたのは6:17-18に示された聖絶に関する契約を破って、自分たちが聖絶の物の一部を取り、それを自分のものの中に入れて、イスラエル自身が聖絶の対象となってしまったのである。それゆえ「あなたがたの中から、その聖絶の物を滅ぼし尽くしてしまわないなら、わたしはもはやあなたがたとともにいない」と主は言われる。

[13-15] ひれ伏していたヨシュアに主は「立て」と命じ、翌朝、民を聖別、すなわち心身をきよめさせて、その罪を犯した人物をくじによって取り分けるように命じられた。主は直接その人物を名指しすることもおできになるが、この場合はくじという方法を用いられた。これは可か否か(イエスカノーか)という二者択一の方法を繰り返すことによって最終的な答えにたどり着くというものである。→出28:30(ウリムとトン

ミム) くじという偶然性の高いものも、実は主なる神の支配の中にあるということが分かる。→箴言16:33 そして最終的にその取り分けられた者は、彼と彼に属するすべてのものも火によって焼かれなければならないとも命じられた。これは非常に厳しいさばきであるが、これが罪のもたらす結果なのである。

[16-18] 翌朝早くヨシュアは主に命じられたことを実行に移す。まずイスラエルを部族ごとに進み出させ、くじを引かせ、それによってユダ部族が取り分けられた。(16) 次にその中のすべての氏族を進み出させ、くじを引かせるとゼラフ人の氏族が取り分けられ、さらにその中から男一人ひとりを進み出させ、くじを引くとザブディが選ばれた(17) ザブディの家族を男一人ひとり進み出させるとザブディの子カルミの子アカンがくじで取り分けられた。(18) ついに個人が特定されたのである。

[19]「ヨシュアはアカンに言った。『わが子よ。イスラエルの神、主に栄光を帰し、主に告白しなさい。おまえが何をしたのか。私に告げなさい。私に隠してはいけない。』」

ヨシュアはアカンを前に立たせ、まず直接その罪を責めるのではなく「わが子よ」と呼びかけ、主に栄光を帰することを第一のこととした上で、何をしたのか、何も隠さずに私に告げなさいと命じる。

[20] アカンは「知りません」「私ではありません」と白を切ることができたであろうか。彼は自分がくじによって選びだされる過程において、確かに主なる神が働いておられることを認めて、もはや白を切るなどできないと観念し、正直に自分がしたことを告白していく。「確かに、私はイスラエルの神、主に対して罪を犯しました。私は次のようなことをしました」彼はまず自分がしたことは主に対して罪を犯したことであったことを告白する。

[21] そしてエリコの町へ攻め入った時に、そこで「シナルの美しい外套一着と、銀二百シェケルと、重さ五十シェケルの金の延べ棒一本があるのを見て欲しくなり、それらを取りました。それらは

今、私の天幕の中の地面の下に隠してあり、銀もそこにあります」と言った。

「シナル」…バビロンの古い呼び名。→創10:10, 11:2 シナルの外套は当時の最高級品であった。また一シェケルは11.4グラムであることがわっているので、銀二百シェケルは2280グラム=2.28キログラム、金の延べ棒五十シェケルは570グラムとなる。

アカンが重さも正確に言っているのは、それを取った後に天幕の中でひそかに手に取って重さを量ったり、感触を楽しんだりしていたことを示している。

[22-23] そこでヨシュアはすぐに使いたちを送りアカンの告白が正しいかどうかを調べさせた。すると確かにそのとおりにそれは天幕の下にあった。それで使いたちはそれらを取り出してヨシュアとすべてのイスラエルの子らのところに持って来て、主の前に置いた。これは主の契約の箱の前であったであろう。

[24]「ヨシュアは全イスラエルとともに、ゼラフの子アカンと銀、外套、金の延べ棒、および彼の息子、娘、牛、ろば、羊、天幕、それに彼のすべての所有物を取って、アコルの谷へ運んだ」

「アコル」とは「わざわいをもたらす(アーカル)」という語の派生語。。

[25-26]「ヨシュアは言った。『なぜ、おまえは私たちにわざわいをもたらしたのか。主は今日、おまえにわざわいをもたらされる。』全イスラエルは彼を石で打ち殺し、彼の所有物を火で焼き、それらに石を投げつけた。人々はアカンの上に石くれの大きな山を積み上げた。今日もそのままである。主は燃える怒りを収められた。それで、その場所の名はアコルの谷と呼ばれた。今日もそうである」

「わざわいをもたらしたのか」と「わざわいをもたらされる」は原語ではどちらも「アーカル」ということばの変化形で「アコルの谷」と語呂合わせになっている。アカンはアコルと同じ「わざわいをもたらす」の意。

このようにしてアカンがさばかれることにより二つの結果が伴った。

①「主は燃える怒りを収められた」

個人主義の傾向が強い現代の多くの人々は、神がなぜそこまで厳しいさばきをなさるのかということが理解できないかもしれない。しかし、神が罪に対して怒り、さばかれるということは、昔も今も変わらない事実なのである。特にイスラエルに対しては、あの出エジプト以来、神が契約を結ばれ、聖なる神の民とされた有機的共同体とでもいうべき民族であるので、一人の罪が全体に影響を与えるのである。今回のアイとの戦いで敗北がその良い例である。それで主なる神はその原因となった人物をさばき、滅ぼし、イスラエルから除き去ることを命じられたのである。これはガンに冒された部分を徹底的に切除することに似ている。そしてそのことが実行されたことによって、主はイスラエルに対する燃える怒りを止められたのである。

②アカンのさばかれた地点に石が積み上げられ、その谷が「アコルの谷」と名づけられて後の時代に対する警告と証しになった。

アカンが生まれた時、どうしてこのような名前がつけられたのかわからない。誕生の時に何かの不幸があったのかもしれない。あるいは彼の本名は別にあって、この事件の後に通称としてそう呼ばれるようになったのかもしれない。アコルの谷の大きな石塚とそれにまつわるアカンの物語はこの場所を後に訪れるすべての人々に、罪の恐ろしさと徹底的な聖さを保つことがいかに大切かということをお教えるのである。

このように見てくると私たちも大きな恐れを持つのではないか。同じ神を信じる者の集まりである教会も霊的なイスラエルとしての有機的共同体である。(ガラテヤ3:26-29、エペソ2章)

ではアカンのように罪を犯した者は殺されなければならないのか。私たちは全員アダム以来の罪の性質を持っており、何度も神を悲しませ、怒らせることをする。では

全員がさばかれ、滅ぼされてしまうのか。そうではない。今日でも神の聖さも罪に対する怒りも変わらないが、神はそのような罪人である私たちすべてのために、ご自分のひとり子であるイエス・キリストをこの世に人として送り、私たちの罪の身代わりとして十字架につけられ、私たちの受けるべき罪のさばき一切を十字架の死によって贖ってくださったのである。このイエス・キリストの十字架の贖いのゆえにイエスを自分の救い主と信じる者は救われ、罪赦される。これが福音である。そして信じた者は霊的イスラエル、神の民、イエス・キリストのからだなる教会とされているのである。

神は聖く、人間の罪を決して見過ごされることはないが、しかし又、神はそのような罪の暗闇の中に座り込んでいた私たち人間をあわれんでくださり、愛してくださり、イスラエルの歴史を通して救い主イエス・キリストを送ってくださったのである。そしてこのキリストにある者は新しくされた者となり、神のみこころにかなった生き方ができるように変えられ、神の民として整えられ成長していくことができるのである。もはやイエス・キリストにある者は罪のさばきを恐れる必要はない。しかし私たちがそのようにして信仰をもって生きていく上でやはり罪を犯すこともあるだろう。そのような時はそのことを正直に神の前に告白して神の民としてふさわしくきよめられていく必要がある。

→ Iヨハネ1:6～9

そのようにして教会は神のみこころにかなったもの、霊的イスラエル、キリストのからだとして成長し、神のみこころをこの地上でなし、神の栄光を現すものとなっていくのである。→エペソ1:23, 2:11～22、Iコリント6:19～20